都小特活
第106号
東京都小学校特別活動研究会
令和2年3月発行
発行人
小島みつる

◎令和元年度◎

東京都小学校特別活動研究会

研究発表大会

令和元年度東京都小学校特別活動研究会の研究大会が、去る2月14日（金）に北区立西浮間小学校を会場として開催された。本研究会では、「集団や自己の生活上の課題を解決し、『自己実現』を目指す力を育てる特別活動」を研究主題に研究を進めてきた。今年度はその1年目として、研究の基調報告を受け、学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の4つの活動部会が研究を進めてきた。

研究発表大会の概要は、次の通りである。

活気にあふれた研究大会

年度末の多用の中にもかかわらず、全国各地から約200名を超す方にご参会いただいた。学習指導要領のキーワードである「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の育成に向けて、特別活動が担う役割への期待の大きさを感じられる大会となった。

会長　小島みつる
（北区立西浮間小学校長）

大会は、開会のことばに続き、小島会長から次のような挨拶があった。

はじめに、本大会に北は茨城、南は鹿児島などからたくさんの参会者があったことが報告された。本研究主題での研究が初年度となり、各部が、「なすことによって学ぶ」という特別活動の基本に立ち返って研究がなされ、その成果が本日発表されることに大きな意義がある。社会が求める人材の資質は、とりもなおさず特別活動で育てようとしている児童の姿である。よりよい社会を創造し、協働する力を育てるために、本日の講師としてご講演いただく安倍恭子先生からのお話で学ぶことが多い。今日を機会に特別活動の充実を図っていこうとし、結びに、日頃より支援していただいている都ならびに各市区町村教育委員会、講師を務めてくださった先生方、各研究団体の代表を務めている諸先生方に対して感謝の意を伝えた。

続いて、ご多用の中ご列席いただいた来賓・顧問の先生方がご紹介された後、氣田研究部長より研究基調報告がされた。その後、に続き、各活動部がそれぞれの創意工夫を凝らして1年間の研究内容や成果・課題の発表を行った。（詳細は、2・3ページ参照）

最後に、指導講評を文部科学省初等中等局教科調査官安倍恭子先生から指導講評と『よりよい生活をつくり自己実現を図る力を育む特別活動』との演題で講演いただいた。自己実現を図る力を育む指導や来年度実施する『キャリア・パスポート』に向けた取り組みなどお話いただき多くのご示唆をいただいた。（詳細は、4ページ参照）

研究発表大会次第

進行　庶務部長　今田喜紀

（1）開会の言葉　　副会長　岡野範嗣

（2）あいさつ　　会長　小島みつる

（3）来賓あいさつ・紹介

（4）基調報告　　研究部長　氣田眞由美

（5）研究発表　　司会　研究副部長　篠遠信行

○学級活動部

「互いに認め合い、自己のよさを生かす学級活動」

○児童会活動部

「関わりの中で『自己実現』を図る児童会活動」

○クラブ活動部

「共通の興味・関心を追求し、自分のよさや可能性を伸ばすクラブ活動」

○学校行事部

「仲間と共に自己のよさや可能性を広げ生かす学校活動」

（6）指導講評

「よりよい生活をつくり自己実現を図る力を育む特別活動」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
安倍恭子先生

（7）閉会のことば　　副会長　新井正一

◎学級活動部◎

『互いに認め合い、自己のよさを生かす学級活動』

1　発表者

大野和代　指導教諭（足立区立千寿第八小）
高橋佳大教　諭（港区立港南小）

2　研究発表

（1）研究内容

学級活動部では、「自己実現」を「自己のもつ可能性を最大限に伸ばし、よさを生かしながら、なりたい自分に向けて努力すること」と捉えた。

学級活動においては、児童が思いや願いを実現するために他者とよりよく関わりながら目標を設定し、自発的、実践的に取り組む力が必要であると考え、研究主題を「互いに認め合い、自己のよさを生かす学級活動」と設定した。

これまでの研究で積み重ねてきた「人間関係形成」、「社会参画」と「自己実現」は明確に区別できないことから、これまでの指導計画を基盤としながら「自己実現」の視点で授業実践と検証を進めた。

視点1　学級活動における児童の「自己実現」の具体的な姿の分析
視点2　互いに認め合うための手だての工夫
視点3　自己のよさを生かすための手だての工夫

（2）研究の方法

○これまでの手だてを「自己実現」の視点での見直し
・「人間関係形成」や「社会参画」を意図した手だてと「自己実現」の関連
・一連の活動を見通した手だての活用
○学習過程における手だての効果の整理
・児童の活動過程の可視化
・児童の自発的、実践的な活動の促進
○学級活動における児童の「自己実現」の具体的な姿の整理
○児童の実態を数値化して把握するための質問紙調査の改善
・実態把握をするための質問項目の設定
・質問紙調査の分析と指導計画の工夫
○学級活動（3）で児童の興味関心を高める工夫
・目標の達成度の可視化
・目標達成への意欲を高める事後指導

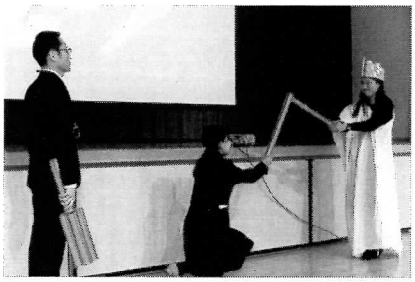
3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○児童の実態を把握するための質問紙調査の作成・分析・変容把握の簡略化が進められ、児童に寄り添う指導計画の改善につながった。
○これまで積み上げてきた手だてを「自己実現」の視点で、学習過程ごとに分解して見直したことから、特別活動において育成すべき3つの資質・能力が密接に関連していることの理解が一層深まった。

〈課　題〉

○新学習指導要領に沿った評価基準を見直し、指導の充実や指導と評価の一体化を図っていかなければならない。



◎児童会活動部◎

「関わりの中で『自己実現』を図る児童会活動」

1　発表者

渋井洋子　指導教諭（東久留米市立南町小）
関田裕子　主任教諭（世田谷区立松原小）
塚田雅子　教　諭（国分寺市立第五小）

2　研究発表

（1）研究内容

児童会活動における『自己実現』を「異年齢交流活動の中で、『自分のなりたい姿』を目指して、全校のみんなのために、その活動の目的や意義を達成していくこと」と定義した。

児童会活動部では、「あこがれ」の存在を「自分のなりたい姿」の一つと捉えた。自主的・実践的な活動を積み重ね、「あこがれ」と「思いやり」のスパイラルを意識した異年齢の関わりの中で、よりよい人間関係が築けると考えた。

（2）研究の視点

①異年齢の関わりの中で『自己実現』につながる児童の様相を明確にする。
②一連の活動の目的や意義とそれを通して育つ力を明確にする。
③学校全体で異年齢交流を組織的に取り組み、活動を広める。

（3）検証授業

世田谷区立松原小学校・代表委員会
国分寺市立第五小学校・給食委員会

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

年度当初の委員会活動でオリエンテーションを行うことや、計画から振り返りまでの一連の活動を継続すること、発意・発想を生かした活動の場を保障することで、「全校のみんなのために」という目的や意義を達成する活動につながった。

自己実現のベースとなる「あこがれ」と「思いやり」を可視化することを通して、相手意識が育ち、自己有用感の高まりやさらなる活動への意欲につながることが再確認された。

〈課　題〉

あこがれの気持ちや自己有用感をベースとして、次の自分の姿（なりたい姿）に近付こうとしている児童の様相をどのように見取っていくか、また、あこがれや自己有用感以外の自己実現のベースとなる意欲とは何かを探っていきたい。基本的な代表委員会や委員会活動の在り方（「児童の発意・発想を生かした活動」の場を保障すること、「計画」から「振り返り」までの活動を一連の活動としてとらえること）についてさらに見直し、より多くの学校に広めていく。

◎クラブ活動部◎

『共通の興味・関心を追求し、自分のよさや可能性を伸ばすクラブ活動』

1　発表者

加　藤　葉　子　教　　諭（江戸川区立上小岩小）
島　田　泰　子　教　　諭（墨田区立曳舟小）
矢　部　　聡　主任教諭（世田谷区立尾山台小）

2　研究発表

（1）研究内容

クラブ活動は、異年齢集団活動の楽しさを味わいながら、自分たちの手で活動を作り出すための方法の理解や力の習得、人間関係をよりよく構築していくための相手を意識した思考力、多様な仲間の個性を受け入れ助け合ったり協力し合ったりしてよりよい人間関係を築こうとする態度といった資質・能力を育てる。

新主題となる今年度は、クラブ活動における自己実現を「共通の興味・関心を追求する活動を、楽しく豊かにするための課題を発見し、自分のよさや可能性を生かそうとすること」とした。これまでの研究で積み重ねてきた、共通の興味・関心を追求する活動の中で、学習過程の充実を図ることで、自分のよさや可能性に気付き、伸ばそうとする児童の育成を目指した。

視点１　一人一人の思いを大切にした指導の工夫

視点２　自他のよさや可能性に気付くことができる指導の工夫

（2）研究授業

世田谷区立尾山台小学校　　パソコンクラブ
江戸川区立第四葛西小学校　和風カードクラブ

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

・児童の変容を見取る手だてとして、短作文、毎回の振り返り、学期ごとのアンケート等を分析した。その資料をもとに指導・助言することで、児童が自分達の思いを生かしながら生き生きと活動する姿が見られた。
・一人一人がより具体的な毎時間のめあてを決められるよう指導した。自分の努力やよさに気付き、次の活動に自分の力を発揮していくようになった。
・クラブ活動通信の発行や、振り返りを充実させることで、仲間のよさを共有することができ、自他のよさや可能性に気付くことができた。

〈課　題〉

・クラブ活動における『自己実現』のあり方をさらに追究し、研究を深めていくこと。
・指導の手だてや評価規準を見直し、指導の充実や、指導と評価の一体化を図っていくこと。

◎学校行事部◎

『仲間と共に自己のよさや可能性を広げ生かす学校行事』

1　発表者

榎　本　誠　太　教　　諭（多摩市立多摩第二小）
久　原　千　恵　教　　諭（板橋区立北前野小）
山　内　佳　奈　主任教諭（江東区立有明西学園）

2　研究発表

（1）研究内容

学校行事は、みんなで力を合わせることで、個人の力も集団のよさもより高めることができ、児童が成長を実感できる場が多くある。集団の中で自分にできることを考え、めあてをもち行事に取り組んでいく。自分の役割を果たし、よさを見つけ合う中で、新たな自分に気付き、新たな可能性を見い出すことができる。また、達成感や充実感を味わうことで、新たなことに挑戦したいという希望をもつことができる。これまでの研究で行ってきた、行事をつなぎ、身に付けた力を次の活動へつなげる過程を大切にしながら、自己実現に向けて自分の役割の意義やよさに気付き、さらに自分の可能性を広げて生かそうとする児童の育成を目指し、本主題を設定した。

（2）研究の視点

視点１　行事のつながりの中で、自分のよさや可能性を広げる指導の工夫

視点２　自己理解を通して、自己実現につながる活動の工夫

視点３　仲間とともに、行事を創り上げる環境づくり

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

・自己実現につながる児童の姿を明確にすることで、具体的な手だてを検証できた。
・掲示板を活用したことで、互いのよさを伝える機会が増えるとともに、これまでの成長の過程やこれからの見通しを共有しながら、行事に取り組めた。
・事前事後指導の工夫をしたことで、児童が行事で身に付いた力を実感でき、自信や次の行事への意欲をもてた。また、学年全体で成果を共有することで、互いのがんばりやよさを認め合い、自己実現につながるめあてを立てる意識が芽生えた。

〈課　題〉

・事後指導の振り返りを、日常の学校生活や次の行事へのめあてにつなげていく手立てを検証していく。
・個人のめあてを決定していくための話合いの方法や形態の有効性を考えていく。
・どの学校でも実践でき活用できる実践事例を作成し、東京都全体に広めていく。

都小特活研究発表大会記念講演

講　演／「よりよい生活をつくり自己実現を図る力を育む特別活動」

講　師／文部科学省初等中等教育局　教育課程課
教科調査官　安　倍　恭　子　先生

・はじめに

今年度の研究テーマ「よりよい生活をつくり自己実現を図る力を育む特別活動」として、それぞれの部会が劇仕立てで発表し、部会のテーマを工夫しながら活動していた。大事なのは、毎年同じテーマで研究していくのではなく、昨年の研究を受けて今年度の課題を見出し、さらに来年の研究をさらに深めていくことである。

・キャリア教育

特別活動は、小学校から高等学校まで継続して学んだことを、実生活や実社会やにつなげていくことが重要である。学級活動では、キャリア教育の視点をより明確にした。キャリア形成とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくための働きかけや積み重ね」のことである。しかし、小学校の段階で「自分らしい生き方」を捉えることは難しい。そのため「なりたい自分」や「よりよい自分」とすることで、児童でも捉えることができる。総則（小学校学習指導要領第1章　総則　第４の１（３））では、特別活動を要として、キャリア教育の充実を図ることと記されている。今日の若者の課題は、学力は高いが「学ぶことが楽しい。」「学んだことを生かした職業に就きたい。」といった意識が非常に低いことが挙げられる。その課題を踏まえ、学ぶことと自己の将来のつながりを見通しをもって前向きに考えていく力を育むことが重要である。そのため、学級活動の内容（３）だけを行っていくことが キャリア教育ではないことも理解しておく必要がある。

キャリア形成における、特別活動の在り方として、教科の学びを総合的に活用するだけでなく、給食・掃除・休み時間においても、教師が指導をして、児童が活動を行って自分の成長を実感することができる。その中での経験や学びが、さらなる力につながっていく。家庭においても、自主学習・手伝い。地域での少年団活動での取り組みということも、子供たちの次につながる学びとなる。そのため、キャリア教育は、学級活動（３）だけでなく、各教科の学び、学校、家庭及び地域での学びや経験をつないで生かすため、扇の要と言われている。また、キャリア教育の充実を図るため、中学校や高等学校での特別活動では、受験や就職のことだけの出口指導ではなく、子供自身がどう生きていきたいかを考えていけるように指導していくことも重要である。さらに、学級活動の内容（３）の「キャリアパスポート」の活用もキャリア形成の充実を図る上で大切である。パスポートを通じて、学校と実社会をつないでいくことができる。

・キャリアパスポート

総則（小学校学習指導要領第１章　総則　第３の１（４））では「（前略）児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること。」また、特別活動の内容の取扱い（小学校学習指導要領第６章　特別活動　第２〔特別活動〕３内容の取扱い）では、「（前略）学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うこと。その際、児童が活動を記録し蓄積する教材等を活用すること。」と示されている。総則との違いは、総則は学習が中心であること。特別活動では、学校での学習だけでなく、家庭及び地域における学習や生活についての活動が中心であること。さらに、児童が自分で見通しを立て、学んだことを振り返り次へとつなげていく。そのことを、子供自身で記録し蓄積するのがキャリアパスポートである。

教材を活用した活動（キャリアパスポート）を行う意義として、一つめは、小・中学校の教育活動全体で行うキャリア教育の要としての、特別活動の意義が明確になること。二つめは、小学校から高校までの学びをつなげ、系統的なキャリア教育を進めることに資するということ。三つめは、児童自身が自分を振り返ることができ「自己理解」を深めることができる。教師にとっても児童生徒理解を深めるためのものとなることである。

パスポートの活用として、特に小学校では、日々行っている振り返りカードや学校行事での記録など、これまで以上に大事にしていくこと。しかし、全ての資料（振り返りカードやワークシート等）を次の学年には持っていくと膨大な量になってしまうため、各学年５枚以内（Ａ４版）と統一されている。そのため、必要な資料を取捨選択したり、書き直したりするなど工夫をしていく必要が求められている。さらに、その蓄積を活用していくところまでを意識して指導を行っていく。指導上の留意点として、学級活動・ホームルーム活動の目的や内容に即したものとなるようにすること。記録の活動のみに留まることなく、記録を用いて話合い、意思決定を行うなどの学習過程を重視することである。

カードの例は様々であるが、地域で決定している形式があればそれを基本に行っていくが、各学校であれば、自分の学校で行っている今の活動を大切にして作成していく。これまでの記録を活用していくための振り返り等の資料を選ぶ際には、児童生徒が、自分のよさや成長を振り返ることができる資料を選びたい。また、児童が振り返ったことに対して、教師や家庭からの応援する言葉が入っていることで、次への意欲にもつながる。自分の成長を振り返るだけで終わるのではなく、自己の成長を実感し次への課題につなげていけるものをキャリアパスポートにしていく必要がある。

・学級活動の内容（３）

学級活動の目標の一文には（１）～（３）の目標が全て入っている。特質が学級活動の内容（１）と（２）・（３）では違う。学級活動（３）では、目標の中の「学級での話合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くための意思決定をする。」といった部分があり、活動内容（２）も（３）も同じ学習のプロセスであり、自己指導能力を高めるものであり特質が似ている。つかむ・さぐる・見付ける・決めるという学習の特質は（２）（３）とも同じように学習のプロセスを提示している。違いは、（２）は、現在の自分の課題決定。原因追求していく。そして、指導内容が具体的であるところ。学級活動の内容（３）は、見通しをもって将来の生き方を描くために、前向きに考え、自己実現につながる力を育成していくところである。「自己実現」は（３）だけではなく、（１）（２）も含まれ、どの活動（学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事）で力を育んでいく必要がある。特に（３）は、キャリアパスポートを活用しながら、子供たち自身が「こんな自分になりたい。」と意思決定をしていく点で、中心的な活動になっていく。

学級活動の内容（３）の充実を図るために、教師に児童生徒の「今の自分」と「将来の自分」をつなぐことができるように指導方法を工夫していく必要がある。児童生徒が「なりたい自分」が見えない状態では、見通しをもつことができない。児童生徒が具体的になりたいイメージがもてるよう、教師側も映像資料やインタビューなど提示する資料を工夫することが大切である。また、児童生徒同士が、話合いによって自分の考えを広げたり、深めたりする活動も必要不可欠である。しかし、児童生徒同士で話合いをさせる際は、児童自身が自己のめあてを決めるための参考になるような話合いでないと意味が無い。（３）では、これまでの自分を振り返って、目指す自分になるためには、今の自分を考えたときにどうしたら良いかを考え、課題解決につなげていくことが重要となる。振り返りの際は、反省だけでなく、もっと良くなることや良くしたいことも振り返りの視点として入れることで、課題に対して前向きに解決していく力が身に付いていく。（３）はこれから研究していく価値がある内容であるため、それぞれの学校で題材を工夫し研究をしていってほしい。小学校から高校までの系統的なキャリア教育の充実を図るためには、小学校で話合い活動が基盤となる。小学校での学びや経験が基礎となり中学校や高等学校へとつながっていくからである。そのため、学校としてどのような力を付けたいのかを毎年考えていくことが必要である。例年通り、同じ議題例のままではいけない。自発的・自治的な学級活動（１）の充実を基盤に、集団活動を充実させ、児童生徒一人一人が「このクラスでよかった。」「この学校で成長できた。」と前向きに頑張る力をこれからも付けていってほしい。

特別活動の力は「成すことによって学ぶ」こと。実感を伴う気付きが次への学びにつながっていく。日々、先生方も子供とともに笑顔あふれる学校生活をつくっていってほしい。

編　集　後　記

会報106号をお届けします。校務ご多用のところ、ご協力いただきありがとうございました。

（編集部：石田、大野、藤井、酒井、仕道、梶原）